

銭貨時代から三貨制度時代への脱皮

Sankaseido=Trio money standard system developed from copper coin era

三 上 隆 三
Mikami, Ryuzou

ABSTRACT

Copper coin is a traditional money, but its purchasing power very little. Since the hinawaju=gun was imported, the military was heavily equipped. If money is only copper coin, needful quantity of copper coin will reach into countless, astromical figures. So that, copper coin find the limit.

Oda Nobunaga is a true pioneer of the trio moneys standard system in the Yedo-Era. He brought out in the 12th year of Yeiroku and Feb. 28 at Kyoto. He ordered to use all copper coin and newly gold and silver coin. This idea is realized by Tokugawa Ieyasu — Koban & Chohgin, and by Iemitsu=his grandson — Kanyei Tsuhoh.

1. 戦国時代の撰銭令の社会的意義

前稿末において室町幕府が専売特許権をもっているかのように、明応9(1500)年の明応撰銭令に始まり10数回ものその発令をくり返した。それは撰銭令といえば室町幕府・室町幕府といえば撰銭令という社会的意識が生まれるほどであった。撰銭令における幕府による改良には、撰銭=受取り拒否の可能銭貨の指定・100文のうち悪銭x枚という混合率・悪銭x枚=精銭1枚という比率の指定等といったものがみられるのみで、根本的改良志向は全くみられなかった。因に和製漢字と思うのだが、粗悪銭のことを鏹銭・ビタセンとよんだが、全く何も与えないということを鏹1文も出さぬとの表現が生まれることに

なる。このビタは、聞くところによれば、ひたすらに粗悪なものなので、ひたすら→ビタになったのだという!?

足利義輝といえは 13 代目の将軍であり、剣豪塚原ト伝に武芸を学ぶすぐれた太刀の使い手でもあった。だが永禄 8=1565 年に三好長慶の養子たる義継と家臣松永久秀の兵の急襲によって、将軍自身が襲撃兵と白兵戦をなし殺されてしまった。世にいう下剋上の典型例であって、幕府の有名無実ぶりを示すものである。

戦国時代に入り各地の武力集団は有名無実化の幕府に代っての京都支配を目指した。そして京都支配の実を示すものとして専売特許権を幕府から入手したかのように、幕府=撰銭令発令→撰銭令発効=幕府に代る天下人という思考から、幕府撰銭令の書式をふまえつつ自分の撰銭令を出すようになる。

奥野高広氏が『兼右卿記』の中で見出したものがある。（「前期封建制と撰銭禁令」——伊東多三郎編『国民生活史研究 2』）それは三好長慶の名で永禄 9（1566）年 3 月 9 日と同年 12 月 19 日の 2 度の幕府令の形式にしたがって発令されたものである。但し実は三好長慶はその前年に没しているのもので、その発令の軽重が問われかねないためなのか彼の喪を秘してのものである。

地方から上洛を果し、将軍に代る天下人になったことをアピールしたいと思う武将は三好一派のみではなく、誰もが願うものだった。一見、同じカテゴリーに一括されかねない者に、尾張から上洛を果して、三好一派と同様に撰銭令に代る新令を出したものに織田信長がある。しかしこれから述べるように、両者の撰銭令間には似て非なるものがある。というのは三好撰銭令が幕府撰銭令のほぼ踏襲に終始しているのに対し、信長は実質的抜本的解決への構想・道筋を示しているからである。

永禄 12（1569）年、上洛を果した信長は、先ず全鐸銭を精銭 1 枚に対し、2 枚で・5 枚で・10 枚でそれぞれが相当するという新しい内容の 3 分類を示して全現存鐸銭の有効活用をはかって撰銭を禁止した。（『定精銭條々』）この信長令は永禄 12 年 3 月 1 日に大坂の四天王寺広場ではじめて公示されたとするところか

ら四天王寺令とよばれ、信長令の第1号令は四天王寺令と等値され、多くの年表も教科書もその日を以って信長令が発令されたものとしている。

しかし史実はそうではない。以下の指摘によって年表・教科書にも訂正がみられるようになった。ではここにいる史実とは何なのか。饅頭屋町文書^{もんじょ}とよばれるものにある記述これである。この記述によれば、上述の四天王寺令よりも早い同年2月28日（旧暦なので30日までである）に、若干の字句の差はあれ、同内容のものが下京に対して（饅頭屋町文書の記述が下京での出来事を対象としているため、上京にも発令されていたことは確かである。このことを示す古文書の発見がまたれる）発令されているのである。

蛇足ながら上述に関連する京都の解説をしておく。京都は日常生活においては課税や土地取引等のための地点の特定以外には町名・番地無用の都市である。無用な二重化表示をさけるためである。これが必要だとして日常生活においても強制しようとするのが中央官庁・東京在住をのぞむ官僚なのである。京都では自宅の所在地点を表示するのに、先ず自宅が直面している道路の名前を書く。たとえば綾小路通り^{アヤノコウジ}に面している家なら「綾小路通」と記す。ついで綾小路通と最も家に近くクロスする道路名を書く。そのクロスする道路が新町通りであるとすれば「綾小路通新町」と書く。決して新町通と書いてはならない。家が直面していないからである。そしてこの綾小路通りと新町通のクロスする地点を中心にして、そのクロス地点より東に家がある場合は東入^{ヒガシイル}・西にあれば西入^{ニシイル}・南なら下ル^{サガ}・北なら上ル^{アガ}と記しその存在地を明示するわけである。したがって当面の対象の家が、道路のクロス地点から西方にあれば「綾小路通新町西入^イル」と書けば日常生活は十二分に過しうる。町名が誤字等で不正確であっても、番地にいたっては全くのデタラメでも郵便物でも荷物でも宅配便も税金通告書さえも間違いなく届く。筆者の場合15年戦争末期に赤紙＝召集令状さえも届けられたのである。

逆に云えば生粋の京都人でも饅頭屋町とのみ聞いても、その所在地はおろか所在方向さえ見当すらつかない。国際的にも有名な京都祇園祭の先頭をゆく

ナギナタボコ シンガリ フネボコ フネボコ
 長刀鉾を出す長刀鉾町とか、殿である船鉾の名をとる船鉾町といった有名なものでも、具体的には〇×〇×^{アタ}辺りと違いまっしゃろかというのが一般だろう。因に日本語の通常の訓みでは人名・地名等、例えば船^ヨ越・船^{フナゴシ}橋・船^{フナハシ}便のように船は正しくはフナである。このひそみになれば船鉾はフナボコになる筈。ところが町衆はフネボコとよぶ。理由は大昔からの^{フネボコ}巡行コースで鉾の進行情報を伝えるに、鉾は外して名称のみ、例えばナギナタは今〇〇を進行している・ニワトリは××にいる等々。船鉾が最終コースの松原通の^{カド}角を廻^{マワ}って新町通に姿を見せるや、フネが無事に^{カエ}還ってきた・おめでとうという気持ちを込めて情報を伝えるのである。鮎にも通じるフナでは様にならぬわけであって必ずフネ鉾でなくてはならないわけである。フナ鉾という人があっても町衆は、心の中でこの田舎者メとさげすみはするものの日常の対応はする。これも有名な町衆イケズ的一端。イケズは文化であってイヂワルとは根本的に違う。

本筋にもどる。横町の町名すらも知らぬというのが日常茶飯事である。300年にわたり洛中に住むという家族の一員として、筆者などはおこがましだが、他の町名・所在地をよく知っている方である。とまれ京都に江戸同様に町名・番地を強制するのは、失礼ながら学歴だけで現実・実務は無知で、捺印を仕事とし天下り得意の東京にしがみついている高級官僚の思いつき・思いあがり以外の何物でもない。

もう1つコメントを。現在の他府県人や一部の新入京都人の多くがもっている錯覚・蒙を解いておきたい。

中京という言葉の文字的意味から他の区域に対し京都の代表的中心地とされている。これは正確な認識とはいいがたい。そもそもといえばえらい大そうなことだが、そもそも洛中の京都は古くから二条大路通りで分断される上京と下京との両地区で構成されていた。昭和4＝1929年にようやく上京・下京の両者から一部を割譲して中京区が出来たのである。下京は古くから町民^{マチシュウ}＝町衆の地域である関係から、例えば有名な祇園祭の山鉾の圧倒的部分が下京で、特に鉾^{ホコ}と称されるものはそうである。地域の文化性・経済活力の象徴たる百貨店・デパー

トにいたっては下京にはあるが中京には1つもないことを知れば十分であろう。

軌道修正。当面の饅頭屋町文書の饅頭屋町とは市内の饅頭屋町という町内での所有文献ということである。その饅頭屋町の所在地点は鳥丸通り三条下ルである。その地がこの2つの道路のクロスによる地点を聞けば、そこが京都のどの部分に位置しているかということは勿論、その地域の住民の階層・経済力までもが自動的に明白になる。ところで当面の文書はこの町内の住民が信長令を見聞して書面を書きとめておいてくれたものというわけである。

2. 貨幣制度化への新構想

戦国時代に入るや、その前の大乱である応仁の乱時代の戦争と比較してその戦闘内容は一変していた。最大の特徴は火器の登場これである。伝来のそして周知の最強騎馬軍団の武田軍を、三段構え——不断に全体として発砲のため——の足輕の発す鉄砲隊が壊滅させた長篠戦がその象徴である。

種子島へ漂着のポルトガル船が伝えたという時点から、約30年後の天正3(1575)年に銃撃戦の展開された長篠戦が起っている。ところが鉄砲の発明地たる西欧での初の銃撃戦である30年戦争(1618-1648)よりも長篠戦は40年以上も早い。

織田軍団は長篠戦で3000丁の銃で装備していた。信長が新し物好きということもあったが、この一戦が天下に周知させたことは、鉄砲が戦国大名の生き残りのための必須条件ということである。このことによって軍事費が一挙に巨額化することになった。これに対応するためには、従来の銅貨＝錢貨では話にならず金銀の登場が不可避になる。火器による重装備の軍隊の維持・移動・戦闘は銅銭では不可能ということである。

かくて戦国大名は、各自の国土を限なく探索し、あれば金山・銀山を開発・経営し、これがなければ他国の金銀山を武力に訴えても奪取することになる。信長は近畿進出と同時に山名氏の生野の銀山を一早く押えている。その延長線上に秀吉の天下掌握と同時の全国金銀山支配がある。石見銀山をめぐる小笠原・

尼子・大内・毛利の、富士・安倍金山をめぐる武田・今川の争奪戦が有名である。

このようなわけで各地で積極的に開発が進み、日本は世界有数の金銀国になる。16世紀末から17世紀にかけて銀銅の産出量は世界の3分の1だったという。西欧での戦争で銅が欠乏し価格が急騰したアムステルダム市場なのだが、日本産の銅が入ってきたため価格が一挙に冷えたという。銅のこの行動は、それほどまでに大量の金銀が掘り出されたことを物語るものだからである。金銀は銅を伴って産出されるからである。

低い科学水準のために銅であることを知りつつも放棄しておかねばならなかった硫化銅から硫黄を抜きとって銅の入手に成功したのは、摂津多田荘山下村の銅吹屋新左衛門の山下吹きの開発である。文亀―永正年間（1501-1521）年のことである。因に吹屋とは鉱石をとかして精分（例えば銅）を採取・精錬するものである。

硫化銅の代表として黄銅鉱・酸化銅のそれは赤銅鉱が有名だが、藍銅^{ラン}鉱はヨーロッパのラピスラズリーに対し、大和絵の紺色の顔料・岩絵具として活用された。それはそれとして山下吹きによって入手された銅の多くは、銅不足であった中国への有力な輸出品＝交易銅として送り出された。ところが中国では「日本に産する銅には、銀の母岩につつまれているのがある。これは炉に入れて精錬する時、表面に銀が集まり銅は下に沈む」（『天工開物』藪内清訳）ということを知った。相当量の銀だけではなくて少量の金までもあったといわれ、中国では競ってこの交易銅を入手したので価格も上昇した。

この事実を知った日本では、まだこの銀抜きとりの技術を知らなかった。しかし日本にあってそれが開発されたといわれるのが天正年間（1573-92年）である。これは南蛮紋りとよばれ、京都の蘇我理右衛門によって果されたという。この理右衛門は住友寿斎と称した。

現住友家の初代とされる住友政友は、京都は松原烏丸の地で書籍と薬の販売を家業として泉屋と称した。彼には姉があり、その結婚相手が理右衛門だった。

トモモチ
2 人の間に友以が生まれたが、子のない政友の養子となって住友家をつぐことになった。この事情で蘇我理右衛門が住友寿斎と称すことになったわけである。

蘇我理右衛門こと住友寿斎は、京都は方広寺の鐘銘事件で有名になった梵鐘用の銅 17000 貫＝約 64 トンを集めて納入したというところから、手広く深く銅とのかかわりをもっていたと考えられる。政友の子となった友以は大坂に出て後の住友の家業となる銅屋の根幹を形成するのだが、これは実父の血を受けつぐものであろう。

ここに豊富な金銀銅が出揃ったので織田信長に再登場を願うことにしたい。というのも既述の永禄 12＝1569 年の銅銭取扱いに関する『定精錢條々』の補足として、それにつづいて信長は『精撰追加条々』を発令した。これによって以下のことを規定した。

ハチボク 1. 以八木売買停止之事

……八木とはこの 2 文字を 1 字にすると米になる。つまり米による取引を認めない。貨幣を用いよということである。正規の法令の中にこのようなフザケタ文字を入れることに、当時の人間のおおらかさがわかってくる。ついで『精撰追加条々』はいう。

1. 糸・葉^{キン}十斤之上（＝以上）、段^{ドン}（＝緞）子^ス十端^{タン}之上、茶碗之具百之上、以金銀可爲商売。

要するに一定量以上にまとまったの高価な物品の売買には金銀を使用せよと命じるのだが、その時には信長は織田軍団の長として、日常的に一定重量以上の金銀塊があれば幾百人の兵を養い、幾十日の兵糧を確保でき、特に幾挺の鉄砲が入手できると思うするはずである。かくて鉄砲による重装備の軍団の維持・移動・戦争遂行に大量の金銀を使用しているのであるから、当然といえば当然かもしれない。がとにかく日常体験にもとづいて商品入手手段としての金銀をすすめたのである。しかし信長は鏝銭の原因である銅貨の酷使をなくすためにも、新たに金銀を貨幣として使用すべしと新提案しているのである。そして同時にツケタリ「付」として金銀の価値を規定している。

金子ハ、拾両之代拾五貫文、銀子ハ、拾両之代、二貫文たるべし。

右の評価に従えば金 1 両＝銀 7.5 両＝錢 1.5 貫ということになる。金の場合、1 両とは本来 10 匁のことであったが、鎌倉時代の頃に 5 匁となり、室町時代には 4.8 匁→4.5 匁→4 匁と軽くなったが、文明 16＝1484 年に 4.5 匁と公定されたものの戦国時代に日常的金量計算の理由によるものと思えるのだが 4.4 匁となって江戸時代に入った。

銀の場合、銀 1 両とは金同様に当初は 10 匁だったが鎌倉時代に 4.3 匁になり、以降そのまま江戸時代を迎えることになった。上述のところから信長の金銀銅の比定・金 1 両＝銀 7.5 両＝錢 1.5 貫は、金 4.4 匁＝銀 32.25 匁＝錢 1.5 貫と表現することもできるわけである。

ところで関西・西日本では交易国たる中国の銀錠という銀貨形態から、自然的に海鼠形態の丁銀が広く流通していた。金の方も砂金形態ではなくて蛭藻金ヒルモキン（秤量貨幣）のように楕円形の板状で流通しはじめており、両以下の単位ブの分・朱シユも出現していた（『多門院日記』永禄 12（1569）、7 月 24 日条）。要するに信長は来るべき江戸時代に成立する貨幣の三貨制度を見越しているかのように、その構想を提示したのである。したがって江戸時代の三貨制度を論ずるに当たっては、その祖が家康ではなくて信長であることを忘れてはならないのである。惜しむらくは、天正 10＝1582 年の明智光秀による不意打ちの本能寺の変によって横死してしまったので、彼の構想は実行・実現されることなくおわってしまった。

3. 貨幣制度化の一時的停滞

信長の構想を実現すべき立場にあったのは、史実の順番からいって豊臣秀吉であった。だが彼は全国を完全に平定するために戦争に時間をかけねばならず、彼には貨幣問題に注ぎうる残された時間が僅少だったこと、しかしそれ以上に、なによりも金銀を貨幣にする以前に、これを彼の黄金趣味・自己顕示に資する芸術品・美術品の作成に終始した。例えば熱海の MOA 美術館蔵で展示されて

いるポータブルの組立式「黄金の茶室」(京都は安井奎工務店製作)がある。この本物!!^{ホンモノ}の茶室は大坂城は当然のこと、京都御所や文禄の朝鮮の役時の大本営たる九州の名護屋城にまでも運びこんで、茶の湯をたてて楽しんだのである。

本来の課題たる金銀貨に目をむけよう。彼が天正 17 (1589) 年に聚楽第で、招待した一門・宮家・公家・諸大名等へ黄金 5,000 枚・銀 30,000 枚を分配したという金賦^{カネクバリ}は有名であるが、その分配対象物は芸術品・美術品としてのものだったことに疑問の余地はない。先ず天正 15 年には公用丁銀にならんで天正通宝銀銭・永楽通宝金銀銭を作成した。この永楽通宝金銭は島津征伐時に手柄のあった者に褒美として与えたといわれている。平成 15=2003 年のこと、萩藩毛利家江戸屋敷跡(東京都港区)から発見の永楽通宝金銀銭も同類のものと思われる。

翌天正 16 年にはまず天正菱大判金が作られた。砂金状ではなくてこれを鎔解して板状にしたものを板金^{ハンキン}とよび、その大型のものを大板金→大判金と称するようになったという。大判金の表面には墨書で金十両 (=1 枚)・製作者の署名——室町時代からの彫金の名家後藤家の徳乗——・花押をしたため菱形の極を打刻したところから天正菱大判金とよばれた。ついでこれよりも長いところから名称がつけられた天正長大判金が、更に両者の中間をゆく天正大判金が作成された。これらの大判金が聚楽第で配分されたわけである。この大判金は前述の蛭藻金をヒントにするその完成品ということができる。更には分銅の形をしているところから小分銅金(重量・100 匁、品位・100 分の 95)を作成した。徳川家康は大坂城落城時にこれを戦利品として入手した。300 個以上で、彼の遺産分けとして尾張徳川家がその一部を得た。これは日露戦争時、国家へ供出され時価で買上げられた。現在は文化財として日本銀行地下の大金庫に管理されている。蛇足ながら戦利品説を否定する説もあるようである。

このような事実と流れを知ると、たとえより長い寿命が秀吉にあったとしても、恐らく彼は実用貨幣の製造・制度化するということは無かつたろうと思われる。したがって信長の構想の現実化・貨幣制度の樹立・仕上げは徳川家康の登場をまたねばならない。このようなわけで対象を秀吉の頭越して家康=三貨

制度にと移すことにする。

4. 日本掌握への猛進

慶長5（1600）年勃発の関ヶ原の戦争で手にした勝利を機に、それまでは同輩＝朋輩の中の1人 one of them から一挙に実質的天下人になったのは徳川家康である。そのことを以下の行動の積み重ねで現実の天下人そのものになった。

①全大名＝全日本を徳川の支配下においた。

②主家にあたる豊臣秀頼を摂津・河内・和泉を領国とする一大名家に押込めた。豊臣秀吉が慶長3年に没し、彼のために同4年に豊国社が建立されるや、秀吉の盟友の前田利家の命で、家康は秀頼の名代としておとなしく豊国社に詣るのだが、同年にその利家が没するや、これまで素振りすらみせず包みかくしていた我欲を突然ムキ出しにし行動開始したのである。

これからの叙述は筆者の頭脳水準を反映して、講談調!?になるが、しばしご海容あってお付き合いを願う次第である。

③前田利家の死去を好機とばかり、秀吉色をぬぐうために、京都の地にある秀吉の手による、あるいは彼の為の建造物の移築・取りこわしを敢行した。例えば豊国社の一建物は琵琶湖の竹生島^{チクブシマ}にある古い社寺用に移築するなど、京都にある本願寺等の社寺へも分配した。また前田利家の命で、豊臣秀頼の傍にいて3年間^{フヤク}は決して離れるなとして傳役^{フヤク}についていた前田利長を秀頼から離すため、再三にわたり帰国をすすめた。が、父の遺命を盾に拒否をくり返す態度に立腹した家康が、こんどは実質的天下人として威圧にでた。利長は母・芳春院と相談した結果、父の厳命に背むくが、この場は家康の命にしたがって大坂を発って金沢に引揚げた。

故郷に帰りついた利長を追うかのように大坂から思わぬ知らせが入ってきた。浅野長政・大野治長等による家康暗殺計画が露見、その主謀者が前田利長であったという。ために家康は利長討伐の準備に入ったとの知らせだった。

これは全くの冤罪であり、身の潔白を示すためにも母・芳春院が人質とし

て大坂から江戸へ下ったのである。これによって家康は目の上のタンコブ然たる前田家を屈服させたわけである。

④豊臣秀頼を一大名格に押込め、盟友関係にあった前田家の切りはなしに成功した家康は、それとならんで豊臣家が押えていた全国^{イワミ}の金銀山を徳川の直轄地とし、産出の金銀を自動的に徳川家の御金蔵に納入させた。例えば代表的銀山として有名な石見銀山の場合、徳川の天下になったので石見銀山を支配する者は徳川であって、銀山はもとより産銀の所有者であることを早々に告知した。

このように全国から納入される金銀と家康自身の備蓄——後に大坂城の落城により御金蔵にあった戦利品としての金 28,060 枚・銀 24,000 枚、更に伏見城からの金銀 230 駄（1 駄は金 600 枚・銀 40 貫）もこれに加わる（『当代記』）——せる金銀によって貨幣の製造に踏み切った。貨幣というものは宣伝料なしで!? 天下は今や徳川のものであると日本全国・津々浦々まで周知させてくれるからでもある。

上述の実質的天下人たることを告げる我利我利一辺倒の家康の行動を祝福・追認するかのように、慶長 8 年に朝廷は家康を征夷大将軍に任命した。ここに家康は名実ともに天下人になり、江戸幕府を開くことになる。

慶長 10 年には家康は将軍職を辞し、子の秀忠が任命され、ここに将軍職が徳川家のものであることを明確にする一方では、もと主家筋の豊臣秀頼には関白職を残しているといわれているものの、既にそれに一條兼孝が任命されていた。秀頼にとっては八方塞りというわけである。

5. 三貨制度の特徴

持てる金銀銅を活用しての江戸幕府総仕上げとして、徳川家康によって創設された貨幣制度を一般的に三貨制度という。金貨・銀貨・銅貨の 3 種がそれぞれ本位貨幣として、無条件・無制限に同時に流通していたので三貨制度の名がつけられたわけである。それには文化性といったものはなく客観的・即物的・機械的な名称である。とまれ三貨制度は江戸時代の日本社会に定着した。

①いま三貨制度の特徴を一括して述べれば、それまでの関係から、中国の貨幣的伝統・特徴をうけつつも、これを乗り越えて日本の特色を出したということである。

銅貨は1枚1文であり、中国銅貨の円形方孔という形態をそのまま踏襲した。これは明治4（1871）年まで本位貨幣として流通した。中国における銅貨流通は秦の半両銭のB.C 336年から清の宣統通宝の1908年の2244年の長期間だった。

銀貨は中国同様に銀塊状のもので、取引において重量を計測し当事者が確認するという古い形態の秤量（正しくはショウリョウ。一般化しつつあるのはヒョウリョウ）貨幣である。これに対し個数をかぞえるだけですむ銅貨と金貨は計数貨幣とよぶ。

金貨は遂に中国では発行されなかったので、この発行によって中国の貨幣的水準を抜くことになった。その形態は優雅というか小判形という独立の名詞にもなる楕円形をしている。古代の中国で散発的に発行された金貨は正方形か長四角であって、この点小判の楕円形はユニークなものである。

②本位貨幣が2つのみの場合、通常は金貨と銀貨なのだが、2つの本位貨幣の流通でさえも、金銀の公定比価と市場比価の乖離^{カイリ}によって波乱が生じ、政権が手を焼くのが世界共通の現象であるのに、江戸時代の貨幣制度は既述のように世界異例のトリオ貨幣を調和・併用していたのである。その成功には幕府当局の行政力は無視しえないのであるが、副次的理由として、全金貨は例外なく銀を雑分として製造されており——したがってこれはエレクトロン貨幣である——、他方銀貨にも必ず少量なりとはいえ金が入っていたことをあげなければならないだろう。

因に両本位制≠復本位制である。両とは2つということであって、復とは2つ以上無限大である。中学生になって初めて英語を学んだ時、一人称の単数は $I \cdot$ ^{アイ}複数は We ^{ウィ}であって、 We は2人だけではなく無限大の人数を意味すると教えられたことを思い出す。こんな思い出話をするのはある事件を体験したからであ

る。

ある東京の出版社が平成 13（2001）年に刊行した『世界史辞典』への執筆に用語解説で参加した。指定された用語のなかに「金銀復本位制」があった。復本位制という言葉は上述理由で日本の三貨制度のためにも残しておくべきで、ここでは記述的内容不変の「金銀両本位制」と改定してはと提案した。これに対し、出版社の事務方は了解したのだが、その報告を受けた編集委員として名をつらねる科学的精神にとみ常識のあると思える大家・教授連は頭ごなしに「この田舎者め」とばかりに拒否したためだった。第一人称複数の We は二人以上無限大だよとの英語の先生の教えを思い出した^{ユエン}所以である。今でも私見が正しいと確信している。

③次の特徴は三貨の素材のすべてが自国産ということである。世界広しといえども極めて現らしいことである。ましてや国産とは本国＝狭小な日本列島のみから算出したという意味であって、その珍しさはこれによって倍加するのである。

今まで金銀銅の三貨を出した国は数多くある。例えば世界帝国の代表たるローマ帝国もそうである。しかしローマ帝国はその素材をイタリア半島から得たのではない。新たに占領・征服した土地から入手したのである。銅はキプロス島からこれを得た。金銀は現スペインから入手した。スペイン北部のカンタブリア山脈から産出の金銀を運ぶ道がサンチアゴ・デ・コンポステーラへの「巡礼の道」とよばれる国道 630 号線なのだが、実は古代ローマが前述の金銀を運び出すために拓かれた道を活用したものである。国道 630 号線上の表示板にはルータ・デ・ラ・プトラ（Ruta De La Plata）＝「銀の道」として記し、その歴史を物語っている。これよりも金の産地として有名なものは、スペインのラス・メドゥラス（Las Me'dulas）でローマ人お得意の山頂に貯めた水道から一挙に水を流して採った砂金 530 トン——710 トンともいう——で金貨を製造した。この採取の最盛期はトラヤヌス帝（在位 98－117 年）時代で、150 年以降は衰退一途だった。異国からの貨幣素材の入手という事情においては大英帝国とて全く同

じどころか、より強力化されるのである。

6. 三貨銘々伝

イ 銅貨

これから三貨制度を構成する貨幣の銘々伝といこう。庶民の貨幣たる銅貨の製造は、どの時代のいずこの主権者も貴金属貨の製造後に実行するのが例である。江戸幕府もその例にもれない。銅貨は慶長6年の金銀貨よりも大幅におくれること35年の寛永13(1636)年に^{ゼニザ}錢座で鑄造された。銅貨は文字通りの^{イモノ}鑄物であって鑄造されるのである。但しこの鑄造という言葉も現在ではなかば死語化しており、造幣局なみに製造と表現することにしたい。

錢座は常設の機関ではなくて必要に応じて随時全国的に設置され、必要目標量を製造すれば解散した。平成15(2003)年8月、山口県は錢座遺跡での出土木簡から寛永14(1637)年に銅貨を鑄造したことがわかった。山口県にも錢座があったということである。一般的には民間の^{ウケオ}請負いによって製造された。ただし製造額の10パーセントを税として幕府に上納しなければならなかった。ために本来的な請負い目的の自己利益をあげるための銅貨の質の悪化原因がここにひそむことになる。

江戸幕府も政権を手にした当初は、室町幕府同様に撰錢行動に困り果てた。禁令も無効果だった。

前稿で既述のように明は^{ミン}秀吉の朝鮮出兵に対し朝鮮軍援助のための軍隊派遣による費用＝財政の悪化や後の^{シン}清の勃興・侵攻による政情不安の増大と銅山の枯渇・新銅山の未開発によって、中国錢の日本への輸出も殆んどなく、市場における撰錢度もそれを反映して増大して行った。

^{ゲンナ}元和2(1616)年の五月令以降は、^{オオカケ}大欠け錢・割れ錢・かたなし錢・ころ錢(^{コウブ}洪武錢→こうぶ→ころぶ＝つぶれる→ころ)・新錢・鉛錢の6種が撰錢可能対象に落つく。

慶長7(1607)年の駄賃定で永樂錢1枚＝一般錢6文と規定されたのだが、同

9 年にはこれを 4 文通用と改定の上、同 13 年に金 1 両＝永^{エイ}1000 文＝京^{キン}錢 4000 文と規定したものの、同時に永樂錢の 4 文通用を禁止した。つまり一般錢なみにした。

上記の金 1 両＝永 1000 文は永勘定^{エイカンジョウ}といい、後北条氏時代以来の関東では年貢や契約等で永勘定が広く使用されていたので、これを明示・維持する必要があったから金貨との関連を記したまでである。永勘定につづく京錢とは南京錢の略で、鏹錢と同義語である。但しいわゆるビタセンを意味するものではなくて上方では上錢とよばれている一般流通の銅錢をさす言葉である。南京錢＝京錢とは丁度中国で臭虫とよばれている吸血虫を南京虫とよぶのと同じ用語法である。したがって京錢とは錢種名ではなくて流通している多種の精錢の総体を指す言葉であって、宋錢がその中心＝標準錢になっていた。ただし標準錢の具体物としての銅錢については、各地それぞれの習慣もあり全国的に共通するものでなく、各地で相異した。

標準錢になるものはそれだけに市場で無条件で行使されうるわけであるから、経済＝物流＝交通の発展が問題を発生させることになった。つまり江戸時代のメイン・ストリートである街道筋で、どの銅錢が標準貨幣になるのかとのより広域での標準貨幣構想が生まれることになり、それにともなって撰錢の度合が激しくなって来た。寛永 11 年に遂に無視できぬ撰錢現象が発生するにいたった。

それまで放棄＝無視をきめこんでいた当局も、この事態によってようやく重い腰をあげて銅錢にも関心を向け、寛永 13 年になって江戸は浅草橋場・芝網縄手、近江は坂本、京は建仁寺等に錢座^{ゼニザ}を設置し銅錢の本格的製造を開始した。寛永通宝錢これである。

このころは国産銅は輸出品の花形でありそのピーク時だった。にもかかわらずその輸出をあえて停止し、そのすべてを銅錢製造の素材として転用した。当局は満を持しての、そして幕府の威信をかけて製造に着手しただけに、幕府の指導・監視のもとベストがつくされた。その当然の結果とはいえ、世界的産銅国の名に恥じない良質の銅貨が誕生した。東洋での銅貨の祖国たる中国でも、日

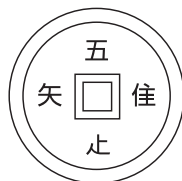
本のこの銅貨は銅貨の優等生として取扱われた。現在でも四川省等の内陸部で、この銅銭が1000枚単位で農家から大事に保存されていたのが発見されたと報道されているくらいである。

ベトナムの貨幣の単位名は銅を意味するドン Dong である。ベトナムは地政学的関係から当然に中国銅貨圏に所属した。このことから既述の明末期の清朝の勃興・銅山の枯渇等々による鉛入りの粗悪銭の流入に悩まされた。そこへ日本からの良質の銅貨＝銅入手で慶賀の意をこめて、第三者からは謙虚とも思えるようなドン＝銅をあえて貨幣名にし、対中国意識を表明したのである。

寛永13年製造の銅貨は、中国の開元通宝を手本にし、1枚1匁・円形方孔で、時の年号をとって寛永通宝の銘を入れ称した。寛永通宝銭は実に銅銭活用による経済の貨幣化→貨幣経済の凡そ500年間の質・量の経済発展過程においてはじめての自鑄銭であって、それだけに庶民の貨幣として江戸時代全国に広く深く愛用された。その結果として銅銭貨幣的文化とでも称しうる現象が生まれた。例えば足袋の大きさ＝長さを示すのに銭貨の直径を単位として文とよんだ。7文の足袋といえ、その価格ではなくてその長さが銅銭7枚分ということである。1文に満たない端数は7文3分^ブというように銅銭の直径の10分の3、半分——これは7文半^{ハン}というようによんだ——10分7の3種があった。これほどまでに寛永通宝銭が日常生活に同化していたということである。

あるいは同貨幣的文化のひとつとして仏教教育に活用された。例として京は御室の竜安寺の方丈の庭にある知足の蹲をあげることができる。中国銭の形状の円形方

孔のもので、方孔には水が満々と湛え^{タツ}られている。一方、コインの銘のあるところに方孔の口を活用して上・五、右・佳、下・止、左・矢の文字「吾唯知足」の句が刻まれており、ここから知足のつくばいの名称が生まれるとともに、庶民に欲を制すことを教えるのである。因みに、徳川光圀が『大日本史』編纂時に、資料として塔頭^{タツチュウ}の西源院からその所蔵の『太平記』を借



用したお札として寄贈したものである。

寛永通宝の製造によって、日本経済が必要とする銅銭の必要量は自給可能となった。かくてこれまで政権を手こずらせた撰銭問題も完全に解消することになった。表現をかえれば中国の貨幣的条件からの絶縁・独立ということである。

経済発展の当然の結果として生じる、銅貨の流通必要量の増大にともなう既存量の不足が顕著になったのは、初鑄から凡そ 30 年後であった。この最初の銅貨不足の対策として寛文^{カンブン} 8 (1668) 年から銅銭の本格的な大量製造がなされた。ただしコインの表面の銘をそのまま踏襲して「寛永通宝」と鑄銘する一方では、このコインが寛文時代製であることを明示すべく、コインの裏面の方孔の上部に「文」の鑄銘を入れた。この事実が先例となり、これ以降、無数に近い大量の錢貨の製造がつづけられるのだが、若干の例外はあるものの、常に「寛永通宝」錢として製造することがルールとなった。

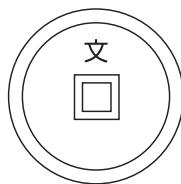
ここで銅銭の寛文大製造にかかわるエピソードにふれておく。寛文 2 年に京都に地震が発生し、方広寺の秀頼の手になる高さ 19 メートルに達するという金銅大仏——父・秀吉の東大寺大仏より大きい木像大仏が地震で破損したので、豊臣の財力＝アンティ徳川戦力をなくす布石として、京都は東寺・北野天満宮、奈良は薬師寺、大坂は四天王寺、河内の叡福寺や石山寺の建立等とならんで、「父君の菩提をとむらいなさい。天下人としての父君にふさわしく」といってもっともらしい口実で秀吉の木像大仏に代るものとして大鑄造させたもの——の首が落ちてしまった。これはニクキ豊臣大仏であるとして、それを再び木像にして、金銅仏全体は当時当局の念頭にあった本格的銅貨製造のための、中国の先例にしたがって銅銭用素材として温存され、事実寛文「寛永通宝」錢に姿をかえた。既述のように寛文「寛永通宝」であることを明示するためにコインの裏面の方孔の上部に文^{ブン}の字を鑄込んだのだが、庶民の思考は当局のそれとは異なり、大仏の身体がコインに化したので文の字が鑄込まれたのだと信じた。そしてこれを「文錢」とよんで特別扱いをした。例えばこれを集めて持仏に鑄直したりもした。

金^{カネ}を木に したらば^{ゼニ}錢を ^さぐっと下げ

文錢寛永通宝の出現で錢相場が下がったという川柳である。

文^{モン}錢の 裏^{シラ}は客^{モンジ}いという 文字

寛文製たることを示す文字の文と方孔の口とで客という文字ができるというのである。とまれ庶民の目は鋭く、批判・皮肉タップリといはざるをえない。



因みに銅錢素材用に鑄つぶされた大仏の代りにと徳川によって提供された木像も、寛政10（1798）年の雷火で焼失、天保年間に尾張国の有志によって上半身の木像がまつられた。これも昭和48（1973）年の火災で消滅してしまった。そもそも豊臣仏＝大仏と京都とは無縁ということなのだろうか。

久しぶりの自鑄銅錢の寛永通宝の話にもどる。1枚は1^{モン}文の通用価値をもつ。相手方に要求量を渡すだけで全取引が終結される計数貨幣である。1000枚を1貫という。但し後述の銀貨の1貫と区別するため、正規には銅錢の場合1貫文という。甲賀宣政によれば成分は銅74・錫15・鉛10で、永樂錢の銅分72よりも良質であった。造幣所たる錢座は記述のように常設のものではなかった。臨機応変とでもいうか、諸事情を考えて錢座は全国化した。この空間的分散とともに時間的条件も加わって、古錢取扱い業者によれば、寛永通宝には製造地の差と製造年代の差により発生するバリエーションが極めて多く、数百とも千種をこえるともいう。

銅錢は日常生活用のものであり、したがって取扱われる量も多いことから、自然発生的に省陥法（ショウカン又はセイカン法、法律の法ではなくて方法の法）という商習慣が普及した。96文が100文として通用したことこれである。この場合は^{ゼニサン}錢緡とよばれる紐状のものを方孔に通して束ねておかなければならない。これを「100文を^{メスケ}目抜にする」という。クロク（＝96）錢ともいう。ただし96文以下は駄目である。

省陥とは不足をはぶくとの意であろうか。その起源としては①慶長年間の両

替商が一般錢 400 枚を永樂錢 100 枚に両替する場合、手数料として永樂錢 1 枚＝4 文をとったので、永樂錢が一般錢なみに 1 枚 1 文と通用するようになって 96 文＝100 文になった。

②錢屋が寛永錢を売る時 100 文につき 4 文をコストとして差引して渡した。

③山崎・大津の関で往還に 2 文づつ計 4 文の税が徴収されたので。

④100 は 3 で割れぬが 96 は $2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 6 \cdot 8$ で割りきれて計算に便利な数である。

⑤中国の先例にしたがったという。例えば梁武帝が 54 年に禁止するまでは 900 文が 1 貫文に通用した。5 代の漢の 948 年に官錢が 77 文を 100 文にあてた。金では 80 文が 100 文として取扱われた、等々。

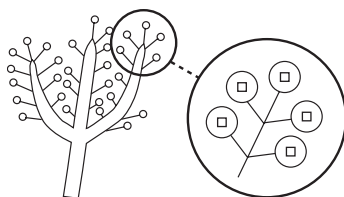
⑥96 文＋錢緡代 4 文＝100 文

⑦奈良時代の錢が 97 文ごとに 1 くくり状態——緡は歲月で腐って消失——のまま発見された事実や、中世では「…料足アカマ（赤間＝下関）ヨリ西八十文，東九十七文也」（『大乘院寺社雜事記』文明 2（1480）年 11 月 21 日条）の流れをくむ。

省陥法の起源各説は、⑦以外は後世の人間が考えついたヘリクツの感が深いようである。それはそれとして、文明開化を標榜する明治新政府はこの省陥法を非合理的な旧習として禁じた。ところが欧化事業導入の一環として郵便制度の創設にあたり、日本最初の郵便切手である竜文切手を明治 4 年 3 月 1 日に発行したのだが、それは 48 文切手だった。切手の地に竜が印刷され単位が文であったことから竜文切手の名が出た。日本貨幣の単位が円・錢・厘の十進法に定められたので、これをうけての明治 5 年 2 月発行の旧竜文 48 文切手に対応する新竜錢切手は半錢＝5 厘だった。ということは自身が旧弊として禁止した省陥法そのものを、江戸時代を通じて 96 文以下は省陥法とは無縁＝駄目との商習慣にも違反した半分の 48 文を活用するという徹底した省陥法?!サービスだったわけである。

ついでながらここで忘却の淵に入りかけているもの救い出す!!ためにも、1 文

銭にかかわる別称単位を紹介しておこう。その1つは1文銭100枚をさして1枝とよぶ。銅銭はご承知のように鑄物として製造されるので、溶解した液状の銅——湯という——を鑄型に流し込んで、いわゆる金のなる木状のものとして出現し、その1枝に33枚、その木が3枝からなっているので合計99枚の銅銭が一挙に生まれるところからの命名と考えられる。



金のなる木

別称のもう1つは疋である。反物^{ヒキ}・いわゆる呉服ものでは1疋とは2反のことである。平安中期で既述のように准布^{タンモノ}1疋などと価格が表示された。鎌倉時代に准帛^{ジュンフ}1疋が10文だったから10文のことを1疋と称するようになったという。犬追物^{イスオウモノ}の犬や鳥1羽に10文を賭けたからともいう。とまれ1疋=10文を前提として、100疋=1000文=(金貨)^{イチブ}1分の故、金1両=4分=400疋となる。このことから形式を内容以上に重んじる上方文化圏では、包装紙上^{カミガタ}に金1両ではなくてそれを敢えて400疋と書いた。このようなことは懷石料理とともに名古屋人の嫌うところであろう。

江戸文化圏のご真中^{マンナカ}に上方文化を持込んだのは朝廷である。戦前の史学者中村直勝氏から面白おかしく加工されたエピソードを聞いたことがある。昭和14(1939)年に宮中行事の御講書初めの進講の時、報酬として10万疋と墨書された祝儀袋を得た。ここからが教授の加工なのだが、10万円も入っているのか、マサカそんなことはありえないのではとワクワクしながら考えた。1疋=10文であるから、10万疋=100万文、これを1両=4千文で割ると250両となり、1両=1円ということから、10万疋と書かれた祝儀袋の中身は250円だったという話だった。

口 金貨

徳川家康が事実上の天下人になった時に製造を手がけた貨幣は金銀貨である。

まず金貨について述べてゆきたい。

豊臣秀吉の許可をえて、家康は支配地のみに流通する領国貨幣製造のために
 本家後藤家の承認によって得た後藤庄三郎光次（その番頭という）をとまなっ
 て関八洲へ下った。その庄三郎光次を長とする金座で金貨を製造させた。慶長 6
 (1601) 年であって時の年号をとって慶長金とよばれる。金座は当初小判座と称
 していた。金座とよばれるようになったのは、後述の元禄大改鑄後の元禄 11
 (1698) 年である。

金座は現日本銀行のある江戸は^{ホンゴク}本石町こと旧地名^{モト}本両替町にあった。ただし
 当初はたんに両替町だったが、銀座が^{スルガ}駿河から移転してきたために両者の区別
 にと金座の地が本両替町・銀座の地は新両替町とよばれた。金座の活動は土間
 のうえでの作業のため、日本銀行建設時にその地の土を精査したところ相当量＝
 土地代相当という金を得たとのことである。

江戸初期の武士間に普及していた貨幣を^{イヤ}賤しむという思想を反映して、銀座
 も同様だが金座は有力な御用達町人による経営とはいえ、公認の常設機関であ
 り、現在語でいう造幣局に当たる。

ここで一寸語学談義を。造幣局は英語で MINT であるが、同じ単語は^{ハッカ}薄荷を
 も意味する。造幣所の MINT はラテン語の Moneta から古代英語の Mynet をへ
 て出来た言葉である。ラテン語のモネタは生産・婚姻の女神 Juno のあだ名であ
 る。古代ローマのカピトリネの丘にあった Juno をまつる神殿でコインが製造さ
 れたところから Moneta は貨幣・貨幣製造・造幣所を意味するようになりミント
 として成立した次第。Money と Mint とは同根派生語・姉妹語である。他方薄荷
 のミントはラテン語 Menta から古代英語の Minte をへて成立したもので、最後
 は同じであっても成立への媒介語は全く別である。

銅貨に先行することの 35 年にあたる慶長 6 年に金貨銀貨の貨幣製造から着手
 した理由だが、既述のように秀吉の許可のもと、支配地のみに流通する領国貨幣
 を製造すべく伴った後藤庄三郎光次に命じて、小判座として武蔵墨小判とよば
 れる領国貨幣としての金貨を既に製造していたこと。物流・経済の発展に対応

して既に各種銀貨が各地で出廻っており、これを統一・制御するのは銀貨そのものののだが、江戸時代貨幣体系の要・中心としての金貨製造が絶対必要だったこと。不安全ながらも庶民用の銅貨は一応間にあっていただけ。庶民用の銅貨の酷使を軽減させるために。そして最後に政治的理由なのだが実力を温存している豊臣秀頼への圧迫が考えられる。秀頼は持てる金銀によって家康の陰謀とはしっけていても、既述の父・秀吉のための方広寺の再建・金銅大仏の鑄造事業を実現するにあたって、これが家康の勧告によるものであっても、直接に金貨たる小判を製造することは不可能である。小判を製造するものは幕府＝金座であって、それ以外は偽造者として罰せられるだけである。ために秀頼はワザワザ大判金を後藤徳乗につくらせてこれを通貨たる小判や丁銀に両替するという大迂回をしなくてはならなかったのである。このようなイジワルをしてニツタリと笑っていたのが家康であるが、同時にこのことから大判金が通貨でなかったことに留意ありたい。

以下順番として金貨について解説しておこう。金貨の基本単位は両・1両＝4^{リョウ}分・1分＝4^ブ朱^{シュウ}、∴1両＝16朱という四進法体系であって、分・朱は両の補足単位である。

慶長金貨（以下慶長金）は1両と1分の金貨＝小判と1分判——判は板にも通じる文字で金貨につけられる——の2種で出発した。後世において2分判・2朱判、例外的に1度だけ1朱判までも製造されたが、この1両判と1分判とは基本貨幣として江戸全期を通じて製造・発行された。したがって他の金貨はある目的のための臨時金貨である。ここに全金貨（大判金とともに）表をかがけておこう。

江戸期金貨表

○……製造・×……不製造

種類	小判	二分判	一分判	二朱判	一朱判	五兩判	大判金
慶長金	○	×	○	×	×	×	○
元禄金	○	×	○	○	×	×	○
宝永金	○	×	○	×	×	×	×
正徳金	○	×	○	×	×	×	×
享保金	○	×	○	×	×	×	○
元文金	○	×	○	×	×	×	×
	×	○ 真文	×	×	×	×	×
文政金	○	○ 草文	○	×	○	×	×
天保金	○	×	○	○	×	○	○
安政金	○	○	○	×	×	×	×
万延金	○	○	○	○	×	×	○

朱という独立の計算単位があるのに、それを具体的に示す＝体現する 1 朱判は、上述のように例外としてのみ文政期に製造されたのみで、この意味において金貨は不完全性を持つものではなかったのか。もとより銀貨がその穴を埋めるのだが。

小判と 1 分判とは同品位であって量目は計算通りの 4 対 1 の関係にあった。小判と 2 分判・1 分判と 2 朱判とは元禄 2 朱判を除いて異質量であって、計算通りの 2 対 1 の関係にはなかった。ただし 2 分判と 2 朱判との間においては同品位であって量目は計算通りの 4 対 1 を原則とした。

両とは本来 10 匁のことであり、中国よりこの単位が導入された律令政府時代は 10 匁であった。ところが貴金属・高貴薬等の特殊品の専用単位としての両は自然発生的に名目と実質との乖離^{カイリ}が生じた。

鎌倉時代には1両の実体は金5匁、銀4.3匁に減少した。その後は金のみが減少したが、室町幕府が1両＝金4.5匁を京目と称して公定した。16世紀後半になると金量の計算体系の四進法の普及のためにか、4.4匁の金が1両の内容となった。この京目1両＝4.4匁が江戸時代金貨の前提となる。

金はやわらかいので通貨として要求される硬さを得るため、雑分として他の金属と合金させるのが国際的ルールである。それによると銅が雑分とされるのが圧倒的である。しかし江戸時代の全金貨は銀を雑分とした。「貨幣は宝。尊敬をうける内容たるべし。」という家康の思想によるとか。

金と銀との合金物はエレクトラム ^{コハクキン}electrum 琥珀金という。したがって全江戸時代金貨はエレクトロン貨幣である。古代西欧・中近東社会のコインはいざしらず。この点は国際的にもユニークな存在である。

西欧型貨幣の原点とされる古代リディア Lydia の貨幣は既述のように天然のエレクトロン貨幣だった。したがって西洋人は古代は別として長らくエレクトロン貨幣など流通してないと信じて疑わなかった。即ち人工的エレクトロン貨幣の作成は経済的・技術的にも無理と考えた。ところがオット・ドッコイ 260年の長期にわたる江戸日本が製造しているとは思ひもしなかったのである。

幕府当局は慶長金貨を製造するに当り、上述のように京目金1両たるまさに4.4匁の金を投入したのであるから、その自負心・心意気には察するに余りあるものだろう。ただし1両判＝小判に4.4匁の金のみがふくまれていると早合点してはならない。というのは以下の通りである。金貨製造に当り、まず10両分の素材として純分としての金44匁が提出されるのだが、上述のように流通に耐える硬度を保持させるために雑分としての銀8.2匁を加えて52.2匁のエレクトラムを作成する。

ついで当局は金座に製造手数料として使用純分量たる44匁の10分の1に当るもの＝4.4匁をエレクトラムから与えた。後にはこの手数料は変化するのだが、出発時点の10分の1をとって分一金と^{フイチキン}か座分と^{ザブン}よんだ。更に製造過程で発生する^{メベリ}目減が0.2匁とされた。これを整理すると以下の通りになる。

52.2 匁（素材）－4.4 匁（分一金）－0.2 匁（目減）＝47.6 匁……金貨 10 兩分
かくて慶長金＝慶長小判 1 枚の量目は 4.76 匁となる。この量に対する質＝品位
の表示法なのだが、庶民＝町人＝商人に知られたくない——そんなことは不可能
なのだが——という秘密主義優先のユニークなものだった。10 兩分の純金量の
44 匁から品位 100%＝純金の場合を 44 の位という。それに雑分として例えば
10 匁の銀を加えたものの品位を 54 匁という。慶長小判の品位は 52.2 匁と表示
するのである。これを現代的に表示すれば $44/52.2 = 842.9/1000$ となる。か
くて小判のふくむ金量は 4.4 匁ではなくて必ず 4.4 匁未満となる。

金貨は計数貨幣 currency by tale であって、必要量を数えて相手に渡せば、そ
の取引は終結する。金貨の量目・大きさが画一化されているからである。この
点既述の銅貨と同じである。

補助単位を担当する金貨たる 1 分判や 2 朱判等は長方形であって、これは中
国の作用からとも思われる。が、基本となる金貨は 1 兩判とはよばず、楕円形と
いうユニークな形態であるところから、これを一般に小判とよぶ。この形態は
小判型という言葉が生まれているように、極めて優雅な姿であって、貨幣ではあ
るが同時に美術品的意識さえも起させるのである。それもそのはずであって、
それを説明するに当ってこれが小判とよばれるようになった前提＝先行の大判
金に言及しなければならない。

金（銀も当然だ）10 兩を^{ヒトツツミ}一裏とよぶ。この場合の「兩」は重量名であって価
格名ではない。10 兩＝1 裏＝1 枚^{マイ}とは室町時代には 45 匁から戦国時代に 44 匁
になる。銀は 43 匁だった。大判金 1 枚とは 10 兩の重量である。銀は枚を常用
し銀 1 枚＝43 匁だった。この場合の枚は^{マイ}小判を 1 枚・2 枚とかぞえる一般用語
の枚とは別の用語である。

金 10 兩を 1 裏とよび取扱うのはあくまでも正式というか公式の場合である。
俗事というか日常的には、例えば葉室定嗣の日乗『葉黄記』の寛元 4（1246）年
5 月 14 日条にみえる「紗（＝砂）金一裏三兩」とあるように 10 兩未満の重量
の砂金が数多く贈答されるのである。

室町時代のころまでは砂金を奉書紙や錦袋等に入れて贈答したので1裏とよぶわけである。だが金が砂金状態では、容具に小さな穴があればこぼれることになり、贈答用には不向きである。それに代るものとして、量目44匁の砂金を原則として鎔解して板状にした。但し品位については厳密なルールはなかったようである。板状化されたものを先ず^{バンキン}板金とよんだ。製造した板金の品位や特に量目を保証するため、製造者は書き判^{サイン}を板上に墨書したのでその判をとって^{バンキン}判金とよんだ。両者を合わせた意味での代表として判金と書き、砂金よりは使用性が広いことを訴えた。

この44匁の判金を作る者は、足利將軍家の彫金師・後藤祐乗五代目の子孫にあたる本家の後藤徳乗の判金座だった。彼は豊臣秀吉の仕事もこなした。徳川家康が1両判を出すに当って判金の小型のものを出すのでこれを小判と称したのである。小判は小判のままだが判金は必ず大判金と金の字をつけてよび（通称は大判だが）、両者を区別する。1両判のことを小判と称するのは大判金あつての事であって、独自の名称でもなければ、ましてやその逆などありえない。

大判金は小判の大きなもの＝高額小判と思われやすいが、決して貨幣ではなくて公家・上級武士間等での贈答用品であり、ために後藤家に美術品として作成させるのである。既述豊臣秀頼が家康の甘言にのって？、方広寺再建・金銅大仏の鑄造の折に、持てる金を大判金にして資金を入手した理由であることが了解していただけたと思う。大判金を高額小判と誤解させる一つの理由は、童謡の『花咲爺さん』の「大判小判がザーク・ザーク・ザックザク」にあるように思われる。

繰り返すが大判金の表面にある10両との文字は1両小判10枚の意ではなくて、1枚ともよぶ重量として10両分である。かくて万延大判金を例外として、目減り分0.2匁を加味して44.2匁を原則として4回製造された。もとより品位が100でないところから量目も純分のそれではない。慶長年間に慶長大判金は同小判で8両2分と規定された。これを道具値段とよぶ。事程左様に大判金は道具なのであって決して高額貨幣などではなかった。これは正確度は別として

大判金には小判の 8.5 倍の純金量があるということを指すものである。とまれ大判金は小判に比して品位は劣るが、使用目的である道具＝贈答＝美術品なので、銀以外に少量の銅を特に混ぜて全体を赤味を帯びた金色にさせ、その審美性を高めた。

ハ 銀貨

金貨同様に銀貨も慶長 6 年に銀座で独占的製造させた。堺の銀細工師の代表格たる湯浅作兵衛に大黒常是を名乗らせ銀座の長に命じ京の伏見に常設機関として開設させた。家康は武田信玄を尊敬した。信長にしたがって武田を亡ぼすや、甲州金体系を前提に三河・駿河・^{スルガ}遠江・^{トオトオミ}甲斐等の一円を金貨の流通圏にする計画をたて、天下をとるや金本位の貨幣制度を整備しようとしたふしぶしがある。ところが目の上のタンコブ然として健在する大坂城の秀頼のもと、銀貨による絶大な経済力をもつ商人・町人をアンティ徳川にしてしまうのを恐れ、金座は江戸に銀座は京伏見に開設することにした。慶長 11 年には駿河にも銀座支店を置いた。同 13 年に銀座を洛中に、同 17 年に駿河銀座を江戸に移した。地名としての銀座の発祥地は京都伏見である。文化の中心地という江戸人!?の自負はよくわかるが、地名の有楽町もまた同じで織田有楽斎がいた関係からそれ以前から祇園町甲部にある。因みに東京産業大学の学名は（現一橋大学）東京商科大学の正式名の商＝商業が、第二次世界戦中戦力増強に無用という軍部の忌憚にふれて改名させられたものである。一橋人が captain of industry を合言葉として唱えていたからである。その産業大学名が現代日本各地で採用されているが、その大学の教師・学生はもとより理事長はじめ当局もその由来は知らないだろう。（有名テレビ番組の「クイズ・ミリオネア」への好問題たることは疑いなし）に入学直後のこと、山手線をヤマテセンといったら、このお上りさんと笑われたことがある。なれば明治時代前期までの半江戸人?＝明治初期住民の口から出ていた秋葉原がどうしてアキバハラなのか矛盾も甚しい、たとえば年寄りの^{ヒヤミズ}冷水!!

軌道修正。銀座で製造の銀貨は、中国の作用をうけての銀塊である。その単位は一般度量衡の匁貫を用い、基本単位は匁。その10分の1は分^{フン}。その10分の1は厘。銀1000匁を貫とする十進法体系である。銅貨の貫は貫文とし銀の貫匁また貫目と区別する。品位は統一され、慶長銀は凡そ銀8対銅2である。ただし江戸銀貨の全てだが、僅少とはいえ必ず凡そ1000分の2の金が混入されている。これは世界的な独自の特徴であって、金貨の場合と同様に家康の命令によるという。

銀貨の銀塊は重量が不統一・千差万別であった。銀は商人のカネといわれていたように江戸日本の経済は銀によって活動していた。商人の合理性に対応して、取引に当って個数をかぞえるだけですむ金貨銅貨とはことなり、取引にあたっては当事者の間に秤^{ハカリ}を置いてその重量を確認して後にはじめて決済ということなる一段階前の古い形式の貨幣である。これを秤量貨幣^{ショウリョウ} currency by weight という。ただし現状ではやがて正しいよみになるかのように、これをヒョウリョウという人口が増えている。

銀貨個体の重量は千差万別といった。しかしそれは2グループに大別することができる。1個あたり40匁前後と6〜3匁とである。前者は海鼠^{ナマコ}状のもので^{チョウギン}丁銀という。包丁や蠟燭等の棒状のものを1挺＝丁とかぞえるところからの名称とか。

取引額が丁銀個体以下——例えば15匁の場合、丁銀を鉦^{ナグ}等で15匁を切りとらねばならない。これを切遣い^{キリツカ}という。この丁銀の切遣いをさけるために後者が作られた。偏平円形の豆粒に似ているところから豆板銀・小玉銀などとよぶ。秤量を省く工夫として丁銀と豆板銀とで銀1枚＝43匁にしたものを和紙でパックしてこれを枚包^{マイヅツミ}といった。更には百目包み・五百目包み等も工夫された。

他方、豆板銀個体以下の取引用にと更に小さい銀塊を作る工夫もあった。今日の社会では姿を見かけないが仁丹^{ジンタン}のような丸葉^{ガンヤク}状のもので、ニックネームのダニ(吸血虫)が物語ってるように、落す等で見失ったが最後、再発見が困難というもの。コンタクトレンズを落して探している光景を想起してもらいたい。

この銀貨を露玉銀とよぶ。

丁銀に対して豆板銀・露玉銀を小粒とよんだ。このホホエマシイ呼び方が江戸の金貨圏に適用されて小判に対して1分判・2朱判等を小粒とよぶようになった。決してその逆ではない。

7. 三貨制度の確立

江戸時代の貨幣を銅貨・金貨・銀貨の順にやゝ詳細に論じた。これら三貨が体系化されて江戸幣制の三貨制度が形成されるのである。以下三貨制度の確立になお残された必要なもの若干について述べたい。

全国から産出の金銀が自動的機械的に江戸城の御金蔵に納入されることについては既述のところである。当面の必要以上の納入金銀はこれを備蓄しなければならない。この余の金銀^{アマリ}を備蓄のために塊にしたり、逆に備蓄されている金銀の塊から大判金や貨幣を製造することを特権として与えられたのは後藤家本家であって、既述の判金座、後の大判座である。備蓄の金銀はこれを分銅形に鑄造した。分銅^{オモリ}・法馬とよぶ。分銅とは秤の重のことである。秀吉が作ったとされる既述1個あたり100匁の小分銅金を作ったことから、こちらは大分銅とよばれている。判金座後藤家の記録によれば、天正10（1582）年10月1日に秀吉の命にて徳乗によって鑄造されたのが大分銅のはじまりという。それに「行軍守城用 勿作尋常資」の銘を刻んだ。通常は千枚吹きとよばれる44貫。秀吉晩年の慶長2年2月に二千枚吹き＝88貫も鑄造されたようである。

江戸時代に入ってから家康は大分銅金を36個鑄造し、林羅山が「行軍守城用 莫作他費^{メイレキ}」の銘を入れたという。将軍家綱の時代の万治2（1659）年に、その直前の明暦3（1657）年に大火が発生した。金の鯨^{シヤチホコ}といえば名古屋城の専売特許のように思いがちだが、事実は左にあらずで、徳川本家を象徴するものとして大天守閣上に遙かに豪華な金の鯨が存在していたのである。ところがこの大火の熱風が天守閣の土壁扉の一部を押しあけて火が入ったという。かくて炎上崩壊してしまった。その後天守閣再建の議が出されたが、家光の異母弟で会津

藩松平氏の祖である保科正之が、その資金を大火で困窮の町人救済にこそ投すべきであると主張し実行された。それを機に江戸城の天守閣は石垣こそ残っているが再建されることなく現在にいたっている。

この明暦の大火によって焼損の金銀から大分銅金 20 個・大分銅銀 128 個が鑄造されて銘として「行軍守城用 勿作尋常費」が採用された。享保年間に吉宗が金銀あわせて 8 個か 9 個の大分銅を鑄造したといわれているが、これは彼の財政改革からの状況判断のようで確かなことはわからない。松平定信が主導した改革で、寛政 5 (1793) 年に「征伐軍旅用 勿爲尋常用」を銘とする大分銅金 5・大分銅銀 1 が鑄造された。ついで水野忠邦による天保改革の産物として、天保 13 (1842) 年に「藏充軍資 泰平宝伝」の銘の大分銅金 3・大分銅銀 23 が鑄造された。

これらのすべての大分銅には無駄遣いするなと銘を入れて子孫に注意しているのだが、事実は慶長・万治鑄造のすべては元禄時代に、あったとして享保・寛政・天保製造のものすべては幕末までにすべて金銀貨に姿をかえて使用されて現物は影も形もない。薩長軍が江戸城総攻撃の直前、無条件開城の報をうけるや、江戸城内からの一切の持ち出し禁じ、現情維持を命じ、イの 1 番に突入したのは御金蔵だったという。軍事費のない薩長軍にとっての朗報として大分銅金 1 箇があると聞いたからである。しかしそこには何もなく部屋全体は綺麗に掃除されていたという。

昭和 60 (1985) 年、中国の上海で日中貨幣展が開催された。造幣局は保管している貴重な貨幣とともに、造幣局 OB の泉友会が万治度の大分銅金の拓本・記録をもとに銅でつくり金メッキを施して大分銅金のソックリさんを作成して出品した。本物の 162 キロ・グラムに対し模型は 54 キロ・グラムである。現物は目下造幣局貨幣博物館に展示されている。大分銅金のかもし出す雰囲気のはわかる貴重な作品ではある。

三貨制度の活動にとって欠かすことのできないもう一つのものは 3 者の比価の公定であろう。少なくとも幕府当局の貨幣政策のよりどころとしても必要で

ある。事実として銅錢の叙述において寛文年間の寛永通宝の大増鑄も錢相場が騰貴したのでそれを公定相場に落着かせるためのものであった。慶長14年に

金1両＝銀50匁＝京錢4000文と比価を公定した。これを純分で示すと金4.4匁＝銀40匁である。織田信長の公定比価たる金1両＝銀7.5両＝錢1.5貫、これを純分で示すと金4.4匁・銀32.25匁である。この両者の比較によってわかることは、日本は金より銀の方が相対的に増産されているということだろう。そしていずれの錢貨も中国錢模造錢であるので錢貨は低評価されたということになる。

このように完備といってもよい万全の配慮をした貨幣制度なのだが、子孫の不徳によって質量ともに悪化するのである。この三貨制度にかかわる変容については稿を改めることにしたい。